

# 教職に魅力を感じる大学生は何が不安なのか

## －1 年次必修「教職入門」受講者の自由記述分析から－

園部友里恵\*

What is the anxiety of university students who are attracted to teaching profession?

Yurie Sonobe\*

### 要 旨

本研究の目的は、教職課程を履修する大学1年生、そしてそのなかでも教職に強い魅力を感じている学生が、教職に対していかなる不安をあわせもっているのかを明らかにすることである。そこで、筆者の担当する必修科目「教職入門」を受講する1年生を対象に質問紙調査を実施した。その結果、彼ら・彼女らは、「児童生徒対応」「業務内容」「職業適性」「保護者対応」「授業」に対して特に不安を抱いていることが明らかになった。また、教職に対して強い魅力を感じながらも教職への不安も強くあわせもっている学生は受講者全体の59.3%を占めていた。教職に強い魅力を感じている学生は、そうでない学生と比べて、自分が教員に向いていないとは感じておらず、また、授業をすることに対しての不安は少ないが、その反面、児童生徒とうまく関わっていけるかということに対して不安を抱いていることが明らかになった。

キーワード：教職の魅力 教職への不安 大学1年生 教育の基礎的理解に関する科目

### 1. 背景と目的

昨今、「教員のなり手不足」がマスメディアで報じられている。教職の魅力発信がなされる一方、その「失敗」も報道されている。例えば、文部科学省が2021年3月に開始したSNSプロジェクト「#教師のバトン」の「炎上」は記憶に新しい。そうした社会の状況は、教育学部に入学してきた大学1年生たちにも少なからず影響を及ぼしていると言える。

教職への不安をめぐるはいくつかの研究蓄積がみられるが、そのなかで最も本研究の主旨と類似しているのは藤原・川俣・福住（2020）である。藤原・川俣・福住（2020）は、先行研究には教育実習や教師効力感などとの関連を検討したものが多く、教職に対する不安に注目した研究知見があまり蓄積されていないことを指摘し、教職課程を受講する大学生の教職に対する不安について、大学1～4年生103名への質問紙調査の自由記述から、その不安を「児童生徒対応」「授業」「保護者対応」「業務内容への不安」「集団対応」「部活動」「管理職や同僚との関係」「職業適性」「採用試験への不安」「教育実習」という10のカテゴリに整理している。

筆者は、2021年度より教育学部1年次「教職に関する科目」の必修授業「教職入門」を担当するようになった。同授業は「教育の基礎的理解に関する科目」のうち「教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム学校運営への対応を含む。）」に該当するものである（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会, 2017）。また、この内容の「全体目標」は、「現代社会における教職の重要性の高まりを背景に、教職の意義、教員の役割・資質能力・職務内容等について身に付け、教職への意欲を高め、さらに適正を判断し、進路選択に資する教職の在り方を理解する」と設定されている（教職課程コアカリキュ

---

\* 三重大大学大学院教育学研究科

ラムの在り方に関する検討会,2017,p.12)。そこで、同授業においても、その目的を「日本における今日の学校教育や教職の社会的意義を理解する」、「教育の動向を踏まえ、今日の教員に求められる役割や資質能力を理解する」、「教員の職務内容の全体像や教員に課せられる服務上・身分上の義務を理解する」、「学校が内外の専門家等と連携・分担して対応する必要性について理解する」と設定した。

同授業の開講準備を進める過程で、筆者は、「教職への意欲を高め」という点に着目した。というのも、教育学部に入学したからといって必ずしも全員が教職を志望しているわけではないこと、入学した時点でそもそも教職に関心のない学生もいることなどを見聞きしてきたためである。しかし、初回授業において、受講者たちに「教職」に関して尋ねてみると、多くの受講者が教職に対して強い魅力を感じていることが明らかになった。本研究で特に着目したいのは、教職に対して強い魅力を感じながらも、教職への不安も強くあわせもっている受講者たちの存在である。

本研究では、教職課程を履修する大学1年生、そしてそのなかでも教職に強い魅力を感じている学生が、教職に対していかなる不安をあわせもっているのかを明らかにすることを目的とする。先行研究では対象が大学1～4年生となっていたが、本研究では大学1年生に特化することで、大学生が教職について深く学ぶ前の段階ですでに抱いている不安の様相の一端を描き出したい。

## 2. 対象と方法

本研究の対象は、筆者の担当する「教職入門」履修者の1年生である。同授業は、2021年度、後期にオンラインにて開講されている。履修者は189名いるが、そのうち177名が教育学部の1年生である。本稿で主に扱うのは、初回授業において受講者が回答した質問紙調査（オンラインにて実施）における自由記述の内容である。同調査には、同授業を受講する1年生177名全員の回答が得られた。なお、受講者に対しては、同調査の回答内容が成績評価に一切影響しないことを、書面及び口頭で説明している。

質問項目は表1に示した通りである。なお、[Q1]と[Q2]については、いずれも単数回答とし、選択肢として「1」「2」「3」「4」「5」「答えたくない」を設けた。また、[Q1-1]および[Q2-1]については自由記述形式とした。

表1 調査項目

[Q1] 現在のあなたにとって「教師」という職業は魅力的なものですか？「非常に魅力的」＝「5」、「全く魅力的ではない」＝「1」として、現在のあなたにとっての「教職の魅力度」を教えてください。
[Q1-1] 上記で「教職の魅力度」をそのように回答した理由や、どんなところに魅力を感じているかを教えてください。
[Q2] 教師になるにあたって、不安に感じることはありますか？「非常に不安」＝「5」、「全く不安ではない」＝「1」として、現在のあなたの「教職への不安度」を教えてください。
[Q2-1] 上記で「教職への不安度」をそのように回答した理由や、どんなところを不安に感じているかを教えてください。

分類に際して本研究が参照するのは、先に挙げた藤原ほか（2020）の10のカテゴリである。具体的には、各カテゴリに分類された記述内容の例は、表2（次頁）に整理した通りである。

以上の質問紙調査により得られた回答について、本研究では、[Q1]と[Q2]でいずれも「4」以上を選択した受講者を、「教職に対して強い魅力を感じながらも、教職への不安も強くあわせもっている学生」とみなすこととした。

表 2 藤原ほか（2020）が生成したカテゴリと記述内容の例

カテゴリ	記述内容の例
児童生徒対応	コミュニケーションをとれるか いじめなどの問題に対応できるか
授業	教科書の内容をきちんと教えられるか 教材研究の進め方
保護者対応	クレームや無茶な要求などの対応方法
業務内容への不安	自分（プライベート）の時間を確保できるか ものすごく忙しいとのことだが、イメージできなくて不安
集団対応	学級経営、運動会などでリーダーシップをとれるか
部活動	顧問になった部活を指導できるか
管理職や同僚との関係	管理職や同僚と良好な人間関係を形成できるか
職業適性	自分が教員に向いているのか分からない 企業への就職も考えている
教員採用試験への不安	採用試験に合格できるのか不安 大学の授業などと両立できるか
教育実習	教育実習で授業や児童生徒対応ができるか不安

### 3. 結果と考察

#### 3.1 「魅力度」と「不安度」の集計結果

受講者 177 名の「魅力度」と「不安度」の回答を整理したのが表 3（次頁）である。「教職に対して強い魅力を感じながらも、教職への不安も強くあわせもっている学生」は 105 名おり、全体の 59.3%を占めていることが明らかになった。「不安度」については、「魅力度」の回答を問わず「不安度 4」と回答した学生が多い。なお、「不安度」の平均は、「教職に対して強い魅力を感じている学生」のうち、「魅力度 4」の場合は 4.10、「魅力度 5」の場合は 3.65 であった。

#### 3.2 何を不安に感じるのか

では、本研究の対象者である大学 1 年生たちは、何を不安に感じているのだろうか。まず、本研究の結果について全体を概観するとともに、藤原ほか（2020）の結果に照らしながらみていく。そして、「魅力度」の度合いによって不安内容は異なるのかを分析・考察する。

##### 3.2.1 不安内容の集計結果（全体）

本研究の対象者である学生全員の回答を見ると、不安に感じるものとしては「児童生徒対応」「業務内容」「職業適性」「保護者対応」「授業」の順に高かった（表 4、次頁）。加えて、本研究では、「その他」「不安なし」というカテゴリを設けて分類していった。その結果、「その他」に該当する記述をしたものは全体の 13.6%みられた。特に多くみられたのが、教職という仕事の「責任の重さ」について触れたものである。例えば、「私にとって「教員」とは、多少なりとも子どもたちの人生に影響を与えうる存在だと考えているため、生半可な気持ちでは教員になってはならないということに少しプレッシャーを感じ

表 3 クロス集計（魅力度×不安度）

	不安度 1	不安度 2	不安度 3	不安度 4	不安度 5	答えたくない	計	不安度の 平均点
魅力度 5	2 (1.1%)	6 (3.4%)	10 (5.6%)	23 (13.0%)	10 (5.6%)	0 (0.0%)	51 (28.8%)	3.65
魅力度 4	0 (0.0%)	1 (0.6%)	11 (6.2%)	51 (28.8%)	21 (11.9%)	0 (0.0%)	84 (47.5%)	4.10
魅力度 3	0 (0.0%)	1 (0.6%)	5 (2.8%)	15 (8.5%)	11 (6.2%)	0 (0.0%)	32 (18.1%)	4.13
魅力度 2	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (1.1%)	6 (3.4%)	0 (0.0%)	8 (4.5%)	4.75
魅力度 1	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.6%)	2 (1.1%)	3.00
答えたくない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	—
計	2 (1.1%)	8 (4.5%)	27 (15.3%)	91 (51.4%)	48 (27.1%)	1 (0.6%)	177 (100.0%)	3.99

注）各項目の下段は、全体（n=177）における割合を示している。

ています。」「生徒の人生に関わる仕事にやりがいを感じる反面、良くも悪くも生徒の人生を変えてしまうことがあるので不安」など、教師という存在が子どもたちの現在や未来に良くも悪くも大きな影響を与えてしまうことへの不安が語られた。その他、少数のものとしては、校種の違い、新型コロナウイルスの影響、昇進、副免許取得に対する不安について書かれた記述がみられた。

また、全体の 5.6%の者が「不安なし」と回答した。例えば、「不安な面よりも魅力の方が多いと考えるのであまり不安は感じていません。」「母が教員をしており、とても魅力的な仕事だが、難しいことも多いと言っていた。確かに、難しいこともあるだろうが、どのみちいつかは難しいことに会うはずなので不安がないわけではないがあまり気には留めない程度だと感じたから。」など、不安よりも魅力のほうが勝ることから「不安なし」と回答した者もいれば、「今のところ教職に就くという考えがないため」のように教職に就くことを考えていないことから「不安なし」と回答した者もいる。

表 4 クロス集計（魅力度×不安内容）

	児童生徒対応	業務内容	職業適性	保護者対応	授業	集団対応	採用試験	部活動	同僚との関係	教育実習	その他	不安なし
魅力度 5 (n=51)	25 (49.0%)	17 (33.3%)	10 (19.6%)	13 (25.5%)	10 (19.6%)	7 (13.7%)	4 (7.8%)	3 (5.9%)	1 (2.0%)	0 (0.0%)	6 (11.8%)	5 (9.8%)
魅力度 4 (n=84)	33 (39.3%)	33 (39.3%)	30 (35.7%)	23 (27.4%)	25 (29.8%)	7 (8.3%)	2 (2.4%)	3 (3.6%)	4 (4.8%)	0 (0.0%)	14 (16.7%)	2 (2.4%)
魅力度 3 (n=32)	10 (31.3%)	9 (28.1%)	12 (37.5%)	11 (34.4%)	10 (31.3%)	2 (6.3%)	1 (3.1%)	0 (0.0%)	1 (3.1%)	0 (0.0%)	3 (9.4%)	2 (6.3%)
魅力度 2 (n=8)	3 (37.5%)	4 (50.0%)	3 (37.5%)	3 (37.5%)	2 (25.0%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)
魅力度 1 (n=2)	0 (0.0%)	1 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (50.0%)
計 (n=177)	71 (40.1%)	64 (36.2%)	55 (31.1%)	50 (28.2%)	47 (26.6%)	17 (9.6%)	8 (4.5%)	6 (3.4%)	6 (3.4%)	0 (0.0%)	24 (13.6%)	10 (5.6%)

注）各項目の下段は、各行（魅力度別）における割合を示している。

本研究の結果を、先行研究として挙げた藤原ほか（2020）に照らすと、「児童生徒対応」が首位であることは同様であるが、いくつかの違いが見られる（図 1、次頁）。

具体的には、本研究が先行研究よりも高くなっているものとして、「職業適性」「業務内容」を挙げることができる。「職業適性」とは、「自分が教員に向いているのか分からない」「企業への就職も考えてい

る」(藤原ほか 2020) といった回答を指す。これは、先行研究の調査対象が大学 4 年生まで含まれているのに対し、本研究では大学 1 年生に限定していることが影響していると考えられる。例えば、ある学生は、「子どもたちと関わる機会があったときに、自分のあり方にとまどってしまい、このままの私では絶対に教師になってはいけないと思いました。まだ教師という仕事についてほとんど何も知らない私が、教える立場に立つことはできないと感じました。」と記述している。大学 1 年生は、教育学部に入学したものの、教職の具体的なイメージを持てておらず、教職が自分に合っているのかを確かめるための機会もまだ少ない。また、2021 年度については、新型コロナウイルスの影響を受け、入学後にもオンライン授業が多く、学校見学や授業観察など対面で学校現場に出向くことも制限されていた。こうしたことも、「職業適性」について不安を抱く学生を生んでいるのではないかと考えられる。

「業務内容」とは、「自分(プライベート)の時間を確保できるか」「ものすごく忙しいとのことだが、イメージできなくて不安」(藤原ほか 2020) といった記述が該当する。これについては、例えば、「労働環境が良くないとよく聞くから」、「残業が多く、自分の時間がとれないと聞くから」などのように、どこで見聞きしたのかは明確ではないもののほか、「#教師のバトン」での負の感情のツイートの多さ「Twitter で#教師のバトンで調べたときに教員の仕事の大変さをいろいろな人が叫んでいたから。」など、文科省の「#教師のバトン」プロジェクトをきっかけに、教職の労働時間や労働環境に不安を抱いている様子がうかがえる。

一方、本研究が先行研究よりも低くなっているものとしては、「部活動」「同僚との関係」「集団対応」「採用試験」「教育実習」「授業」「保護者対応」がある。このうち、「部活動」については、先行研究では「顧問になった部活を指導できるか」(藤原ほか 2020) というものが記述例として挙げられていたが、本研究において「部活動」に分類された自由記述は、例えば「部活動の顧問になったら土日が拘束されてしまうところ」のように、労働時間との関連で記されているものがほとんどであった。また、本研究においては、「教育実習」に関する不安に触れた記述がなかったことから、大学 1 年生にとって教育実習は、まだ遠い先のイベントと捉えられていることがみえてきた。

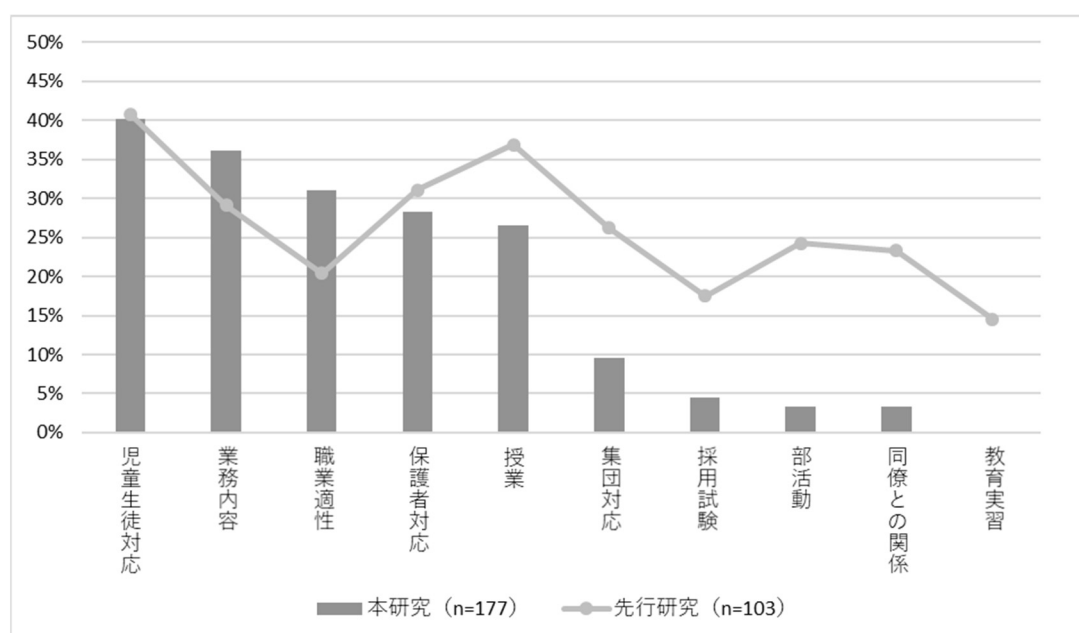


図 1 何を不安に感じるか(先行研究に照らして)

注)「その他」と「不安なし」は、図には掲載していない。

### 3.2.2 魅力度別の不安内容

次に、魅力度の回答によって不安内容は異なるのかをみていく。図2は、各不安カテゴリについて、そのカテゴリにあてはまる記述をした回答の割合を魅力度別に整理したものである。

「児童生徒対応」については、「魅力度」の回答が「5」「4」「3」の順に低くなっていることがわかる。また、「職業適性」については、「魅力度5」と回答した者の不安が少ないことも読み取れる。「授業」についても、同様の傾向が読み取れる。したがって、「魅力度5」と回答した、教職に強い魅力を感じている学生たちは、他の学生と比べて、自分が教員に向いていないとは感じておらず、また、授業をすることに対しての不安は少ないが、その反面、児童生徒とうまく関わっていけるかということに対して不安を抱いていると考えられる。

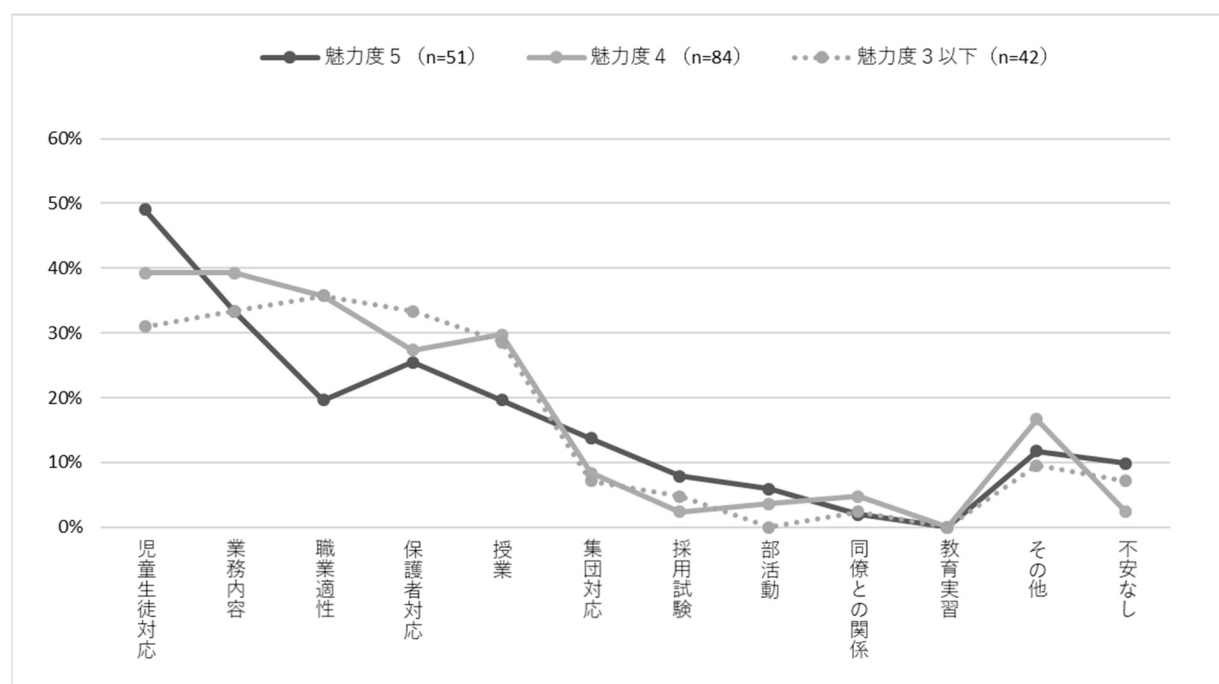


図2 魅力度別の不安内容

### 3.3 魅力度も不安度も高い学生は何が不安なのか

では、教職への魅力度も高いにもかかわらず不安度も高い学生は何が不安なのだろうか。ここでは、まず、「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は高いが不安度は低い」学生とを、そして、「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は低いが不安度は高い」学生とを比べていく。

#### 3.3.1 「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は高いが不安度は低い」学生の不安内容の比較

まず、「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は高いが不安度は低い」学生の回答を比べてみたものが図3(次頁)である。ここからは、同じように魅力を強く感じていたとしても、不安も強く感じる学生の不安内容を読み取ることができる。

「魅力度も不安度も高い」学生が特に不安に思う内容としては、「児童生徒対応」「保護者対応」「集団対応」がある。いずれも、子ども(個人・集団)やその保護者にかかわっていくものである。

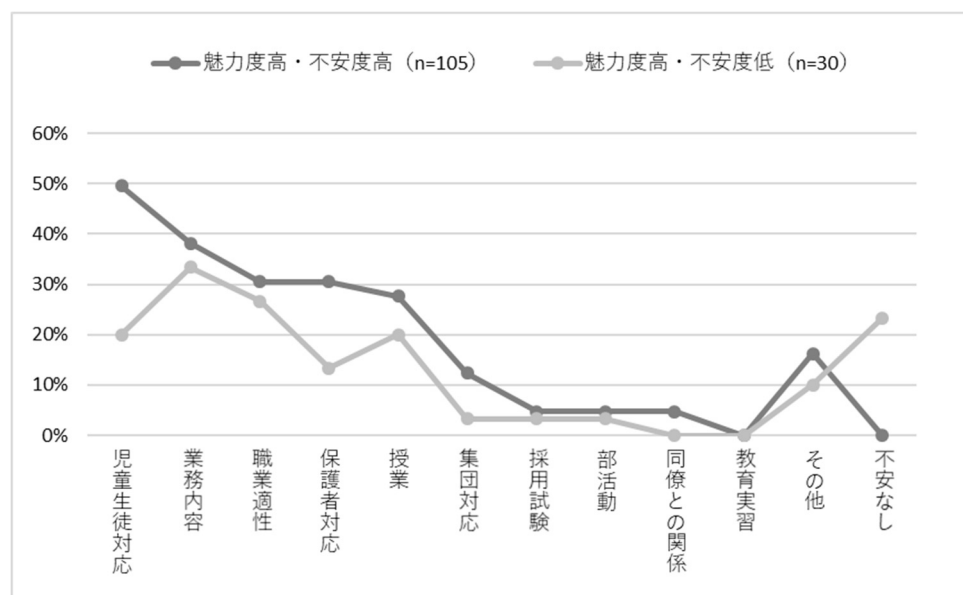


図3 「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は高いが不安度は低い」学生の不安内容の比較

### 3.3.2 「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は低いが不安度は高い」学生の不安内容の比較

次に、「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は低いが不安度は高い」学生の回答を比べる。図4からは、同じ「不安度が高い」学生であっても、魅力度の高低によって不安内容にいくつか違いがみられることがわかる。

「職業特性」「保護者対応」を除くすべての不安内容において、魅力度の高い学生のほうが割合が高いことがわかる。そのなかでも特に、「児童生徒対応」や「授業」については、魅力度の高い学生のほうが不安に感じているようである。対して、「職業適性」「保護者対応」については、魅力度の低い学生に比べ、不安に感じる学生の割合は低いことがわかる。

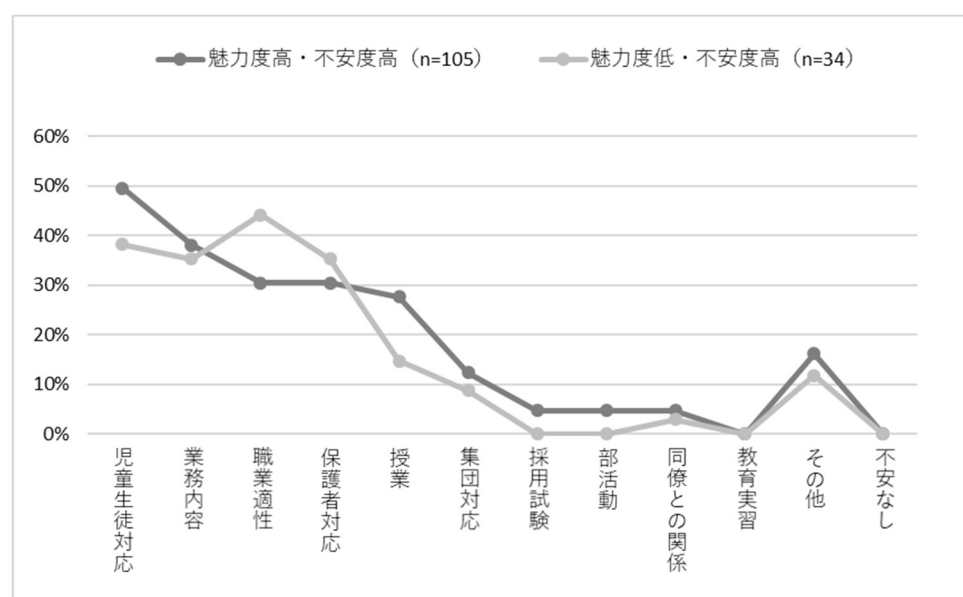


図4 「魅力度も不安度も高い」学生と「魅力度は低いが不安度は高い」学生の不安内容の比較

## 4. まとめと今後の課題

### 4.1 まとめ、実践の方向性

本研究の目的は、教職課程を履修する大学1年生、そしてそのなかでも教職に強い魅力を感じている学生が、教職に対していかなる不安をあわせもっているのかを明らかにすることであった。

その結果、必修科目「教職入門」を履修する1年生たちは、「児童生徒対応」「業務内容」「職業適性」「保護者対応」「授業」に対して特に不安を抱いていることが明らかになった。先行研究に比べると、本研究において対象とした学生たちは、「職業適性」「業務内容」に対して特に不安を抱く傾向がみられた。こうした不安は、教育学部に入学したものの教職の具体的なイメージを持てておらず、また教職が自分に合っているのかを確かめるための機会もまだ少ないことや、ソーシャルメディアを中心に叫ばれる教職の労働時間や労働環境の問題を見聞きしてきていることなどによって生み出されていると考えられる。

また、教職に対して強い魅力を感じながらも教職への不安も強くあわせもっている学生は受講者全体の59.3%を占めていた。教職に強い魅力を感じている学生は、そうでない学生と比べて、自分が教員に向いていないとは感じておらず、また、授業をすることに対しての不安は少ないが、その反面、児童生徒とうまく関わっていけるかということに対して不安を抱いていることが明らかになった。

「教職入門」は、1年次必修の「教育の基礎的理解に関する科目」である。そして、その目的の1つに、教師という仕事の「全体像」を把握するというものがある。本研究の結果から示唆されるのは、「教職入門」で扱う内容を、学生たちがより教職に対するイメージを具体的にできるようなかたちで提示していくことが、彼ら・彼女らの不安を軽減することに結びつくのではないかということである。

「教職入門」では、例えば次のような取り組みをおこなっている。1つ目は、不安を受講者間で共有することである。自身の抱えている不安が他の受講者にも共通していると実感することが、不安の軽減に結びつくのではないかという仮説のもと取り組んでいる。2つ目は、現職教員との出会いを創出することである。本学教職大学院の実務家教員や現職教員学生、修了生をゲストとして招き、受講者の課題記述等に目を通して感じたことや考えたことなどを語っていただいている。こうした語りのなかには、学生たちが特に不安を強く抱きがちな「児童生徒対応」をめぐる、学校現場で日々子どもたちと向き合ってきた教師たちだからこそ語れる内容が多く含まれている。

学生たちは、教職に対して不安を感じていようがいまいが、今後、教育学部で過ごすなかで、自身の専門領域に特化した学びが本格化していくことになる。この「教職入門」で扱った内容が、そうした専門領域の土台として、教師という仕事のありかたを考える上で有効に働くことをめざして、今後も実践を続けていきたい。

### 4.2 今後の課題

本研究では、教育学部1年生、特に教職に魅力を感じる学生たちが抱く不安の様相を捉えてきた。学生たちがもし「過剰な不安」を感じているのだとすれば、それは軽減していく必要がある。しかし、本研究は、必ずしも、教職への不安がゼロになることを理想とはしていない。というのも、不安があるからこそ、自身を過信したり、「できたつもり」「わかったつもり」になったりせず、子どもたちや同僚教員たちをはじめとする多様な他者と関わっていけると考えられるためである。その意味においては、学生たちが「不安だけれど、大丈夫」と思えるような、「こちよい不安」を感じられるようにすることが「教職入門」の役目の1つなのではないか。

現在も、「教職入門」は進行中である。今後、15回の授業を全て終えたときの受講者の学習成果を辿ることにより、上に示した実践の方向性が学生たちの不安の軽減に結びつくのかを詳細に検討していく



とともに、この「教職入門」が「こちよい不安」を創出する場になれるよう、授業改善を重ねていきたい。

また、今回は、「教職に強い魅力を感じる学生」に焦点化した但、教職に魅力を感じないま教育学部に入學してきた学生も存在している。彼ら・彼女らが魅力を感じるのを抑えているのは何か、また彼ら・彼女らが教職に魅力を感じるようになるために「教育の基礎的理解に関する科目」の一担当者として何ができるのかを、今後も「教職入門」での実践を通して考えていきたい。

## 引用・参考文献

教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）「教職課程コアカリキュラム」

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf)（最終アクセス：2021/11/30）

藤原和政・川俣理恵・福住紀明（2020）「教職課程を受講する大学生の教職に対する不安の探索的検討」『教育カウンセリング研究』10（1），p.41-45.

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、F 研の熊谷信司さん（株式会社マクロミル）には、量的調査の初歩からとても丁寧に教えていただきました。今回の調査分析からみえてきたことをふまえ、学生たちの不安を少しでも取り除けるように授業改善に励みたいと思います。また、「教職入門」にゲストとして話題提供してくださった、教職大学院の実務家教員の先生方、教職大学院の修了生・在籍生の皆様、そして一緒に授業をつくってくれている「教職入門」受講者の皆さんに心より感謝申し上げます。